

●実際にこの河床の安定化対策で、工事が始まったのが平成19年からで、この5年目の施策の振り返り時点では、上流の落差工が3基と帶工の2基までしか施設整備ができていない。それで評価すると数字が非常に小さくなる。現在の平成24年時点においては、順次帶工の整備が増えてきている中で算定すると、その数字は大きくなっているので、年数を経れば十分その数字は上がっているということはある。ただ、この5年目の施策の振り返りで時点評価すると、小さい効果量になってしまっていることである。

●委員会資料43ページのH21というところか。ここで5年目の施策の振り返りというのは、落差工3基しかできていないと言ったのは。

●委員会資料43ページのH22のところである。上流の落差工3基と、No.12号、No.11号帶工のところである。

●効果量は、もし何も対策を行わなければ、出ていった土砂量に対する継続方向の割合になっているのか。それなら確かに少ないのでかもしれない。全体としては、河道の安定化対策区間から大量に流出していた土砂を止めたのだから、効果量は小さくはないのかもしれない。ただ、算出方法が分からず、それがよいかどうか議論できない。4%よりももう少しもあるような気がする。

●その辺を整理させていただきたい。

●継続方向に分割している。だから上流の方は少しあないという意味か。

●そうである。工事が終ったところだけの評価している。

●5年目の施策の振り返り資料28ページは、4-1久著呂川となっている。委員会資料26ページの農地からの沈砂池での捕捉で、捕捉率が例えば44%から75%など、色々な数字が出ているが、かなりの割合で農地から出てくる土砂は捕捉しているということは出されているので、これも農業側の対策としては効果だと思う。それをこの5年目の施策の振り返りの中でも触れてもよいと思う。ここでは4-1久著呂川というだけで、4-2以降は記載されていないので、そのような効果も加えてはいかがか。

●久著呂川の流域に設置されている沈砂池の効果量は計上している。ただ、5年目の施策の振り返り時点の評価なので、小さい効果量となっている。

●釧路開発建設部農業が計画している沈砂池は、すべて設置し調査も終わっており、ここに記載されている4mが、釧路開発建設部農業の沈砂池の効果である。ただ、5年目の施策の振り返りの効果量としては、モデル的に流域対策として実施してきた久著呂川流域を対象に取りまとめており、ほかの流域の調査結果が入っていない状況である。今後、他の流域も含めて効果量を記載するということであれば、沈砂池の効果量は増加する。

●佐久間委員のところで、苦労して効果を発揮しようとしており、是非、そういうのも織り込んだらどうか。

5 その他

このようなことが話し合わされました

●委員長 ●委員 ●事務局

●一つ提案というかお願いであるが、昨日開催した第11回水循環小委員会では、水質に関する検討を始めることになり、そこで土砂の話題も上がり、色々な川で実際に事務局の方で計測されていることから、その土砂がどこから来ているのか分からなかといふ話題だった。

●土砂に関しては、この土砂流入小委員会があり、色々な観測や、モニタリングを行なっていて、お金も労力もかけられている。そのような情報を水循環の方でも是非、情報交換をしていただきたいといふ話が出た。それは土砂だけではなく、例えば再生普及小委員会の方に関わっている委員の方からも、再生普及小委員会でこの釧路湿原自然再生協議会がある、あるいは各小委員会がやっている成果などを広めたい。のために委員会同士の情報交換などを促進してくださいといふ話があった。特に我々は委員会時しか集まらないが、事務局の皆さんは常にいろんな情報交換を行なっていると思うので、その辺を促進していただければと思う。是非お願いしたい。

第17回 土砂流入小委員会[出席者名簿(敬称略、五十音順)]

●個人

井上 京
(北海道大学大学院 農学研究院 教授)

清水 康行○
(北海道大学大学院 工学研究院 環境フィールド
工学部門 水工・水文学研究室 教授)

新庄 興

杉澤 拓男

長澤 徹明○
(北海道大学 名誉教授)

早川 博
(北見工業大学 社会環境工学科)

●団体

鶴居排水路維持管理組合
(組合長/瀬川 勝巳)

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
(井上 雅子)

標茶西地区農地・水保全隊
(隊長/佐久間 三男)

●関係行政機関

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部
(釧路河川事務所長/桑原 誠)

環境省 釧路自然環境事務所
(国立公園・保全整備課自然保護官/石月 聖文)

北海道 釧路総合振興局 釧路建設管理部
(治水課長/木原 俊哉)

標茶町
(建設課長/井上 栄)

鶴居村
(加古 貴将)

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

<http://www.kushiro.pref.hokkaido.lg.jp/kk/kkk/dosyaryunyu.htm>

ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。
電話・FAXにて事務局まで御連絡ください。

釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

TEL (0154) 23-1353

FAX (0154) 24-6839



古紙配合率100%再生紙を使用しています

釧路湿原 自然再生協議会

土砂流入小委員会 ニュースレター

平成25年3月22日(金)「第17回土砂流入小委員会」が開催されました。

■開催概要

「第17回土砂流入小委員会」が平成25年3月22日(金)に開催され、構成員31名のうち、14名(個人6名、団体3団体、関係行政機関5機関)が出席しました。

開会に先立ち、釧路湿原自然再生協議会初代会長であり、釧路湿原をはじめ国内外の湿原研究と保全活動にご尽力された、辻井達一先生(1月15日永眠)のご冥福を祈り、出席者全員で黙祷を捧げました。

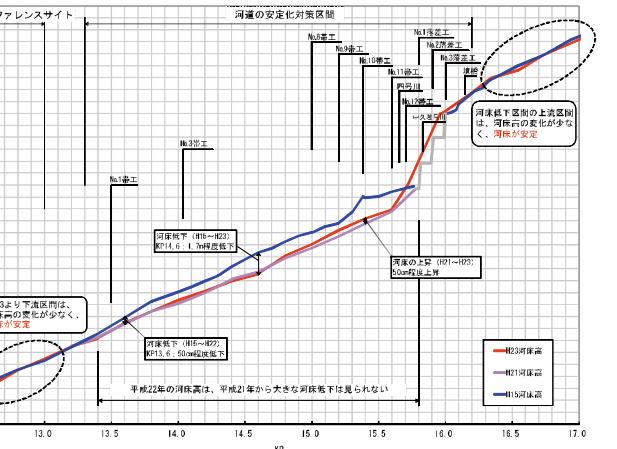
会議の冒頭、第6期土砂流入小委員会の委員長及び委員長代理の選任が行われ、委員長には第5期に引き続き、清水康行委員(北海道大学大学院 工学研究院 環境フィールド工学部門 水工・水文学研究室 教授)が委員長に、長澤徹明委員(北海道大学 名誉教授)が委員長代理に選出されました。

その後、清水委員長の進行により「河道の安定化対策」、「排水路合流部沈砂池」、「湿原流入部土砂調整地」、「釧路湿原自然再生5年目の施策の振り返り」について、事務局からの報告及びそれに対する協議・検討が行われました。



1 河道の安定化対策について

■河床低下区間の縦断の経年変化



このようなことが話し合わされました

●委員会資料6ページの河床低下区間の縦断の経年変化については、KP15前後で河床の上昇や堆積が行われているように見え、河床が安定化しているように思えるが、実際の河床勾配は見た目では分からぬ。

●また、委員会資料16ページの今後の進め方では、KP15からKP15.2までの計画河床高は1/400の勾配で計画されており、それより上流側で1/137の勾配と、同じような川幅のところで、河床勾配が異なっているが、今後の河道の安定化対策の中で、勾配がなぜ違うのか、また委員会資料6ページとの関係について説明していただきたい。

●委員会資料16ページについては、場所によって河床勾配が変化している。河道の安定化対策区間は凝灰岩が露出しているところが多く、その現況の河床勾配を重視した上で、計画勾配を決めている。場所によっては、川幅が広い部分もあつたりするが、概ね現況の河床勾配を基本に計画している。

●河床勾配が途中で変化するので、土砂が堆積したり、侵食したりする心配はないのかというような質問だと思う。

●河床勾配の変化点で、侵食や堆積という変化も出てくると思うので、その部分についてはモニタリングを行なうながら、もし侵食傾向にあるのであれば、河道の拡幅等も含めて対策を考えていきたい。

■今後の進め方(河道の安定化対策)



このようなことが話し合わされました

●現況河床をなぞるような形で計画河床の施工高を決めているが、将来、この計画で河道が安定していくのかということについては、検討を行なっていたのか。

●委員会資料16ページの縦断図の一番下には、概ね現況の河床勾配1/200や1/400を示しているが、その上に計画河床勾配の1/180を記載しており、当初の計画では、最終的にはこの高さまで河床を復元させていきたいと考えていた。

●今言われている河床勾配1/200や1/400が、計画河床勾配で安定化するのかどうかについては、実際に施工した中でモニタリングしながら、その安定度を判断していく考えていた。

●委員会資料6ページの縦断図で、KP14.8からKP15.6までの間で、河床は現在上昇傾向にある。凝灰岩より上部に土砂が堆積してきているから河床が上昇していると考えられるが、施工の高さが一定の勾配にはなっていない。施工の高さは、現況の河床高に合わせて設定していると思うが、帶工の天端高や、凝灰岩より上に礫が堆積しているのか、もしくは礫が堆積してきているが天端高より下にあるのか。今後の計画が変わってくると思うがいかがか。

●凝灰岩の高さを縦断図に入れて見せてほしいということか。

(次ページへつづく▶)

